

長寿医療研究開発費 平成26年度 総括研究報告（総合報告及び年度報告）

高齢者排泄ケアセンターの設立を目指した地域包括モデルと
人材育成システムの開発に関する研究（24-16）

主任研究者 吉田 正貴 国立長寿医療研究センター 手術・集中治療部 部長

研究要旨

3年間全体について

本研究の目的は高齢者が可能な限り排泄を自立し、QOLが維持できるようにするために全国レベルでの高齢者排泄ケアセンターを設立するための基盤を確立することである。その目的のために本研究では、高齢者排泄ケアの現状についての具体的な内容を科学的見地から分析して、老人施設や在宅の現場で使用できる排泄ケア基準を確立するとともに、この分野での専門的知識を有した人材を確保するために高齢者排泄ケア人材育成プログラムを開発する。また、地域における高齢者ケアの実施が可能かどうかを検討し、その設置に必要な基準を検討するとともに、拠点施設間の連携を行うためのシステムを構築することである。研究は大きく、①高齢者排泄ケア基準の設定、②高齢者排泄ケアに関わる人材の育成、③地域基幹施設の役割の設定と各施設間の連携の確立の3つの内容に分かれており、主任・分担研究者がそれぞれを担当している。

まず、老人保健施設や在宅における排泄ケアの現状と問題点の把握のためのアンケート調査を行った。老人保健施設のおむつ使用者は全体の63.5%、留置カテーテルは5.7%、CICは0.13%であった。訪問看護ステーションで訪問看護を行っているもののうち尿道カテーテルが留置されている者は全体の11.8%、おむつ使用は全体の約70%、CICは2.2%で行われていた。このアンケートの対象となったおむつ使用者の中で、おむつ外しが可能と考えられるものが約40%存在していた。おむつ使用やカテーテル留置のための基準を定めたマニュアルなどを使用している施設や訪問看護ステーションは20%以下であった。これらの結果を踏まえて、看護師、介護士などが実臨床で活用できる「高齢者排泄ケアマニュアル」の作成を手がけ、これがほぼ完成した。また、情報発信や地域、職種間の情報交換用のホームページの作成、人材育成のための講習会で使用するスライドの作成と整備を行った。

人材育成プログラムのモデルと考えられる名古屋大学排泄情報センターの「排泄機能指導士」に対するアンケート調査を行い、人材育成の有用性と問題点を検討した。この検討結果を踏まえて、人材育成用の講習会で使用するテキストの作成がほぼ完成した。また、平成26年11月には近隣の高齢者排泄ケアに関わる看護師、介護士、ケアマネージャーなどを対象として、作成したテキストやスライドを用いての排泄障害に関する第1回目の講

習会を開催した。講習会の内容については、どの職種でも理解でき、現場で役に立つ内容との評価であった。

さらに、現在地域で活動中の各事業体に活動の実態、運営上の問題点等についてアンケート調査を実施した。各事業体の現在の運営形態はNPO、大学、任意団体など異なり、主な活動の内容は、市民公開講座や勉強会の主催、事例検討、泌尿器科受診への橋渡しの役割などであった。活動資金が潤沢と言える事業体は無く、自治体からの出資、会員からの会費、講演会開催による収入などで賄われていた。活動の規模は小規模に行われている事業体がほとんどであり、セミナー等で得られる収入のほとんどは会場費や講師招聘料に充てられており、各事業体のメンバーのボランティアにより維持されていた。地域での高齢者排泄ケアシステムの構築およびさまざまな職種での排泄ケアに関する教育や職種間の連携の強化を目的として、関連学会において2つのシンポジウムを開催し、現在積極的に活動中の各事業体の活動の実態、運営上の問題点と今後の展望に関して、また各種職種間の教育システムや人材育成と今後の地域連携や各職種の教育および職種間連携についての議論を行った。

平成26年度について

以前より作成中であった「高齢者排泄ケアマニュアル」のゲラ刷りが完成し、現在製本に向けた修正・追加などの作業が進行している。本マニュアルは、介護・看護の専門職、あるいは在宅でご家族の介護をされる一般の方を対象に、現場での排泄障害に対して、どのように対処すべきかを示したものである。できるだけわかりやすいように、教科書的な記載はさけて、QA (Question and Answer) 形式で記載した。また、人材育成のための講演会で使用するスライドの作成および整備を行った。

老人保健施設や訪問看護ステーションを対象としたアンケート調査の中で、本研究が目指している「高齢者排泄ケアセンター」の設立については、老人保健施設の74%、訪問看護ステーションの84%が、「あった方が良い」との意見であったことを踏まえて、「高齢者排泄ケアセンター」の立ち上げを行うために、現在国立長寿医療研究センター内での設立の準備などを進めている。

人材育成用の高齢者排泄ケアに関するテキストもほぼ完成した。平成26年度はこの作成したテキスト内容の検討、さらには様々な講習会などでの排泄ケアに対する教材としてふさわしいかなどの検討を行った。具体的には、排泄ケアに対するスペシャリスト（医師、看護師、介護士など）に、その内容を吟味していただき、正当性、妥当性の検討ならびに各項目の必要性、過不足の検討を行った。また、このテキストおよび作成したスライドを活用して、近隣地域の看護師、介護士、ケアマネージャーなどを対象とした、高齢者排泄障害とそのケアに関する第1回講習会を11月に開催した。

さらに、関連学会において高齢者排泄ケアシステムの構築および、さまざまな職種での排泄ケアに関する教育や職種間の連携の強化を目的とした2つのシンポジウムの開催に至

った（第 27 回日本老年泌尿器科学会「高齢者排泄ケアシステムの整備に向けて」；第 21 回日本排尿機能学会「排泄ケアにおける多職種連携・人材育成の課題と展望」）。これらのシンポジウムでは本研究で設立を予定している「高齢者排泄ケアセンター」の有用性が認識された。また、各職種間のみならず同一職種内でも教育内容や知識レベルに差があることが示され、実地臨床での職種間の連携や、有能なスタッフ育成のためには本研究で目指している統一された人材育成プログラムの重要性が確認された。

主任研究者

吉田 正貴 国立長寿医療研究センター 手術・集中治療部 部長

分担研究者

松川 宜久 名古屋大学大学院医学系研究科泌尿器科学 助教

本間 之夫 東京大学大学院医学系研究科泌尿器外科学 教授

研究期間 平成 24 年 4 月 1 日～平成 27 年 3 月 31 日

A. 研究目的

本研究の目的は高齢者が可能な限り排泄を自立し、QOL が維持できるようにするために全国レベルでの高齢者排泄ケアセンターを設立するための基盤を確立することである。その目的のために本研究では、高齢者排泄ケアの現状についての具体的な内容を科学的見地から分析して、老人保健施設や在宅の現場で使用できる排泄ケア基準を確立するとともに、この分野での専門的知識を有した人材を確保するために高齢者排泄ケア人材育成プログラムを開発する。また、地域における高齢者ケアの利点と問題点を検討し、その設置に必要な基準を検討するとともに、拠点施設間の連携を行うためのシステムの構築を図る。本研究全体の流れ図については図（次頁）に記載した。

日本老年泌尿器科学会は、高齢者排尿障害マニュアルを 2003 年に発刊し、高齢者尿失禁ガイドラインなど的高齢者の排尿に関するマニュアルも発刊されてはいるが、介護や在宅レベルでの排泄管理にこれらがどれほど活用されているかは明らかにされておらず、有用性の検証もなされていない。本研究で予定している実地診療に則した高齢者排泄ケアに対する統一したケア基準（マニュアルなど）の作成は、全国レベルで排泄ケアを均てん化するために重要と考えられる。また、作成したケア基準の実践と有用性の検証についても考慮する。

名古屋市においては名古屋大学排泄情報センター、愛知県、NPO 愛知排泄ケア研究会による看護師、介護士などを対象とした排泄機能指導士養成プログラムが進められている。しかし、全国的にみるとこのような人材育成プログラムは積極的に行われているわけではなく、確立されたシステムもない。これを全国レベルで行い、統一した教育や啓発、情報の

提供を行うことは重要であると考えられる。さらに教育を受けたスタッフの間の連携の確立は情報の共有やケアの促進のためにも必要不可欠である。

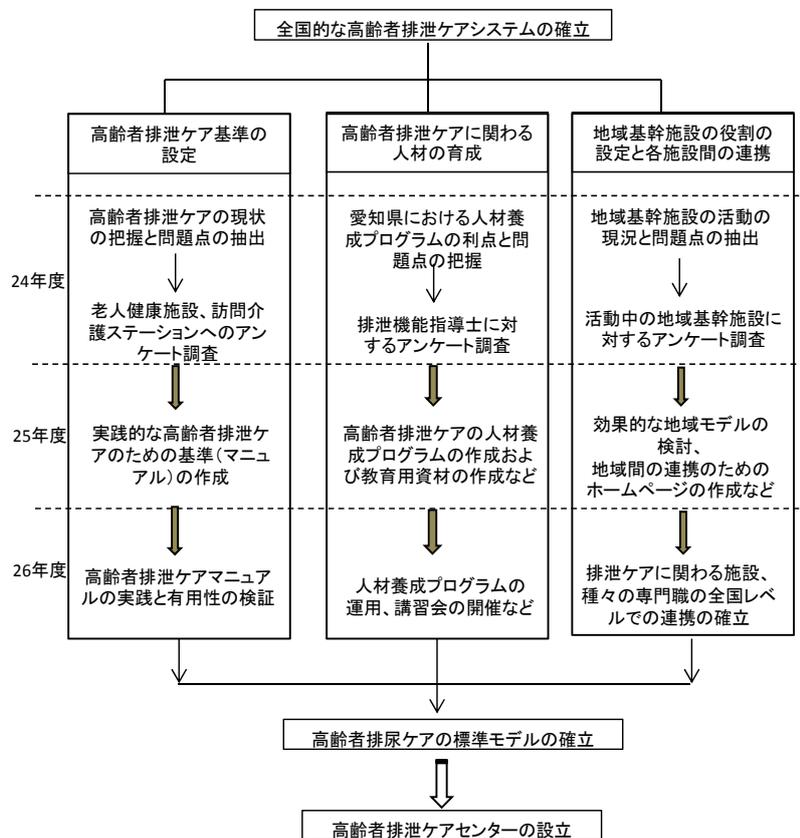


図 研究全体の流れ図

これまで、いくつかの地域で高齢者排泄ケアに対するネットワークやシステムが立ち上がり、その運営がなされてきている。たとえば名古屋大学排泄情報センター、NPO 愛知排泄ケア研究会、碧南市における高齢者排泄管理の地域モデル、北九州市、香川県、山形県などの高齢者排泄ケアへの取り組みなどである。これらの地域では基幹施設を中心に活動がなされているが、システムの運営体制や方法はまちまちであり、実際の活動の具体的な内容についても各地域で異なっている。これまでにこのような取り組みの現況、有用性や問題点を調査し、比較検討したような報告はなく、これらを明らかにすることは、今後新たな地域での基幹施設やシステムの設立のために必要と考えられる

以上のような観点から、①高齢者排泄ケアの基準の統一化、②人材養成プログラムの開発、③高齢者排泄ケアの地域拠点施設の役割と地域包括モデルの構築の検討は、超高齢化社会を迎えた我が国においては避けては通れない課題と考えられ、本研究の意義は高いと思われる。

本研究により、高齢者の排泄ケアの均てん化が図られ、全国の医師、看護師、介護士、ホームヘルパーなどの医療従事者間の連携が容易となり、新しい情報の迅速な入手や情報交換が可能になると考えられる。また、実際の排泄ケアにおける問題点なども、迅速に解決できるようになると思われる。さらに本研究は新たな地域高齢者排泄ケアの基幹施設の設定にも寄与できるものと考えられる。今後は、高齢者排泄ケアについて全国レベルでのネットワーク形成が必要と思われ、本研究の成果は当センターでの設立を目指している「高齢者排泄ケアセンター」の基盤となると考えられる

B. 研究方法

3年間全体について

各研究課題の研究方法を記載する。

1) 高齢者排泄ケアの基準の設定

適切な排泄ケアの具体的な内容を科学的見地から分析し必要と思われる項目を設定する。高齢者排泄ケアを標準的に行うためには排泄ケアに対する指針の作成が必要である。そのためには老人保健施設などの排泄ケアの現況を明らかにするために全国の老人保健施設や訪問介護ステーションを対象としたアンケート調査を行う。また、これまで、作成されている高齢者尿失禁の評価・治療ガイドライン、介護・看護者のための排尿障害チェック表、高齢者排泄管理マニュアル、オムツ選択基準、排泄評価表、老人施設・在宅での排泄リハビリテーション施設評価基準、高齢者排尿障害マニュアルなどをもとに、適切な排泄ケアを行うための実臨床に即した新たな高齢者排泄ケアマニュアルを作成する。また、この高齢者排泄ケアマニュアルおよび人材の育成プログラムの開発で作成された資料を利用して看護師や介護士などを対象とした講習会を開催する。

2) 高齢者排泄ケアに関する人材の養成

高齢者排泄ケアの実践において重要な役割を果たすと思われる、排泄に関する専門知識と技術を有する人材育成システムの構築を計画する。具体的には名古屋大学排泄情報センターとNPO法人愛知排泄研究会の協力を得て、排泄機能指導士を対象に、アンケート調査を実施し、その結果をもとに、ケアの均てん化を図るために、看護師や介護士などを対象とした人材育成用の資料の作成（テキストやスライド）を行う。

3) 地域基幹施設の役割の設定と各施設間の連携

高齢者排泄ケアを行うためには、一定の地域において機関施設や団体および種々の専門職の連携が必要である。これまでに高齢者排泄ケアへの取り組みを開始している愛知県、北九州市、香川県、山形県などをモデルとして、地域の基幹施設とその地域の病院や開業医、介護・看護支援施設との連携の在り方、人材育成の方法、資金面の状況などについて調査して、取り組みの有用性と問題点を明らかにし、地域基幹施設の在り方を検討する。また、地域連携や多職種連携を図るために関連学会でのシンポジウムなどを計画・実施して、意見交換を行う。

これらにより、今後予定している「高齢者排泄ケアセンター」設立の検討を行う。

平成26年度について

平成24年、25年度の成果をもとに、以下のことを計画する

- ① 高齢者排泄ケアの基準の設定：昨年度行った老人保健施設や訪問看護ステーションにおけるアンケート調査の結果を参考として、「高齢者排泄ケアマニュアル」の完成を目指す。新たな情報の発信、各施設間での情報交換の促進やこの領域に関する研究の計画および支援を行うために活用できると考えられるホームページの運用を開始する。人材育成のために必要と考えられる多職種を対象とした講習会で使用する資料の作成にあたり、スライドの作成を行うとともに、分担研究者、研究協力者などからスライドの提供を受けて整備を行い、これらのスライドを用いて講習会を開催する。
- ② 人材養成プログラムの開発：昨年度までに作成した排泄ケアに対するテキスト内容の検討、さらには共通の排泄ケアに対する教材としてふさわしいかなどの検討を行う。具体的には、排泄ケアに対する複数の専門家（医師、看護師、介護士など）に、その内容を吟味していただき、正当性、妥当性の検討ならびに各項目の必要性、過不足の検討を行う。その検討をもとに内容を修正加筆し、名古屋大学排泄情報センター・NPO 愛知排泄ケア研究会協同により実施されている排泄機能指導士の養成プログラムの中で、テキストとして使用し、内容などの評価を行う。また複数の排泄ケアを施行している施設に配布し、実際の排泄ケアの現場で使用していただき、妥当性、有用性を評価する。またソフト面でも、セキュリティの高いシステムサーバーを利用し、テキスト内容が電子媒体としてダウンロードできるように、普及ならびに充実をはかる。
- ③ 高齢者排泄ケアの地域拠点施設の役割と地域包括モデルの構築の検討：「高齢者排泄ケアセンター」の設立を検討する際の参考に資することを目的として、現在積極的に活動中の各事業体の活動の実態、運営上の問題点や今後の展望に関してと、各種職種間の教育システムや人材育成について、学会で2つのシンポジウムの開催を企画して、今後の地域連携や各職種の教育および職種間連携についての議論を行う。

(倫理面への配慮)

3年間全体について

本研究は厚生労働省から出されている臨床研究に関する倫理指針に従って行う。本研究は医療の質の向上のために行われるものであり、倫理的な問題は存在しない。また、患者などへの聞き取り調査では無いため、個人情報を含んでいない。

C. 研究結果

3年間全体について

分担課題ごとに3年間全体の結果を記載する。

① 高齢者排泄ケアの基準の統一化（吉田）

全国の老人保健施設（2,838施設）と全国の訪問看護ステーション（5,534施設）を対象とした施設入所者および現在訪問中の患者の排尿障害の実態に関する調査（内容としては留置カテーテル、おむつ、間欠導尿などに関するもの、各施設の居室の状況、排泄解除用具、排泄介助に関わるスタッフなどに関するもの、排尿管理について現在困っていること、問題点や改善点を記述する項目）を行った。

老人保健施設のおむつ使用者は全体の63.5%、留置カテーテルは5.7%、CICは0.13%であった。訪問看護ステーションで訪問看護を行っているもののうち尿道カテーテルが留置されている者は全体の11.8%、おむつ使用は全体の約70%、CICは2.2%で行われていた。このアンケートの対象となったおむつ使用者の中で、おむつ外しが可能と考えられるものが約40%存在していた。おむつ使用やカテーテル留置のための基準を定めたマニュアルなどを使用している施設や訪問看護ステーションは20%以下であった。また、現在排泄ケアについて困っていることに関しての多くの意見が寄せられた。

尿道留置カテーテル、おむつ、CICに関するアンケート調査のまとめを下の表に示した。

尿道カテーテル留置に関して

	老人保健施設など	訪問看護ステーション
留置者の割合	5.7% (男性7.3%:女性3.8%)	11.81% (男性14.7%:女性11.2%)
留置時期	入所時すでに:59%	病院退院時:80%
留置の決定	医師:80%	医師90%
抜去を検討	75%	66%
留置の基準 抜去の基準	マニュアル15% マニュアル5%	マニュアル10% マニュアル8%
1年間でのカテーテル抜去患者	1.23%	0.53%
泌尿器科を受診した患者	2.45%	5.31%

おむつに関して

	老人保健施設など	訪問看護ステーション
おむつ着用者	63.8% (男性63.4%:女性63.9%)	70.0% (男性63.8%:女性73.3%)
使用理由	トイレ排尿可能だが 失禁あり:34% 尿失禁予防:6%	トイレ排尿可能だが 失禁あり:28% 尿失禁予防:12%
使用の決定	介護士・看護師・保健師: 80%	
使用の基準	討議65%:マニュアル9%	討議52%:マニュアル3%
おむつ外しの検討	積極的に検討60% 検討しない:25%	積極的に検討65% 検討しない:26%
1年間でおむつ外し ができたもの	4.6%	1.2%

間欠導尿に関して

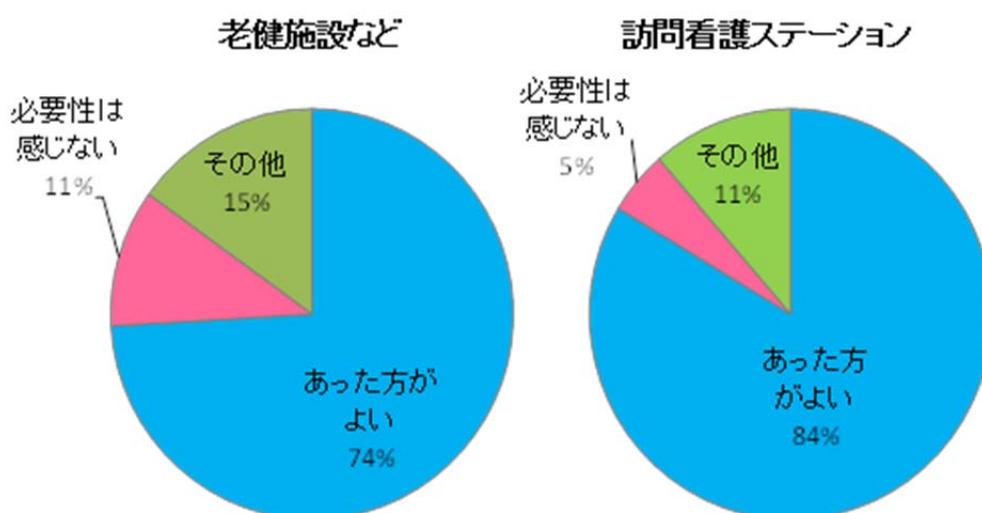
	老人保健施設など	訪問看護ステーション
施行している者	0.13%	2.2%
スタッフの間欠導尿 の経験	あり:47%	あり:70%
施行の基準	担当者の判断34%:討議 31%:マニュアル17%	担当者の判断17%:討議 43%:マニュアル16%
指導することがある	12%	79%
CIC施行者で泌尿器 科を受診している者	70.3%	69.5%

上記の内容を学会で発表して論文化するとともに、上記のアンケートの中で多くの意見が寄せられた内容（おむつの選択や当て方、おむつ外しの手順、おむつによるスキントラブルなどへの対処法、尿道留置カテーテルの留置・抜去基準、カテーテルの大きさ、固定方法、膀胱洗浄の是非や手順、紫バグ症候群、男性患者での尿道下裂に関すること、CICの導入や実際の手順、頻尿とくに夜間頻尿や夜間多尿への対処法、ADL障害による機能的尿失禁、認知症患者の排泄ケアなど）を中心に、「高齢者排泄ケ

マニュアル」の作成を手がけた。

この「高齢者排泄ケアマニュアル」はほぼ完成しており、現在製本に向けた修正・追加（索引の作成）などの作業が進行している。本マニュアルは、介護・看護の専門職の方、あるいは在宅でご家族の介護をされる一般の方を対象に、現場での排尿障害に対して、どのように対処すべきかを示したものである。できるだけわかりやすいように、教科書的な記載はさけて、QA（Question and Answer）形式で記載した。また、分担研究者：松川が作成したテキストや人材育成用のスライドを活用して、近隣地域の看護師、介護士、ケアマネージャーなどを対象とした、高齢者排泄障害とそのケアに関する第1回講習会を11月に開催した。

老人保健施設や訪問看護ステーションを対象としたアンケート調査の中で、本研究が目指している「高齢者排泄ケアセンター」の設立については、老人保健施設の74%、訪問看護ステーションの84%が、「あった方がよい」との意見であったことを踏まえて、早期に「高齢者排泄ケアセンター」の立ち上げを行うために、現在国立長寿医療研究センター内での設立の準備などを進めている。

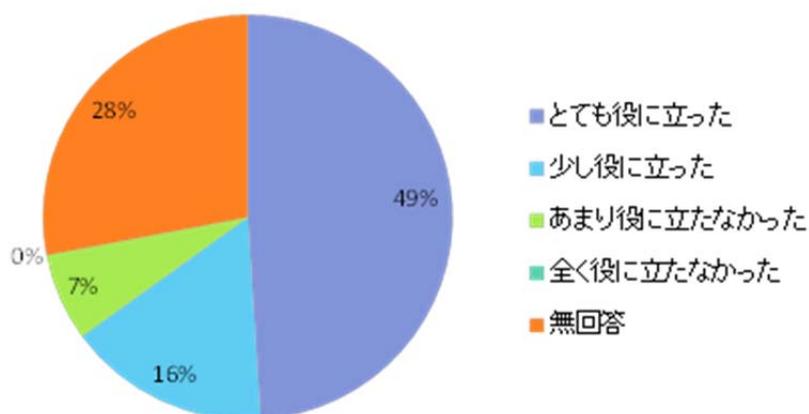


高齢者排泄ケアセンターの必要性

② 高齢者排泄ケアに関わる人材の育成（松川）

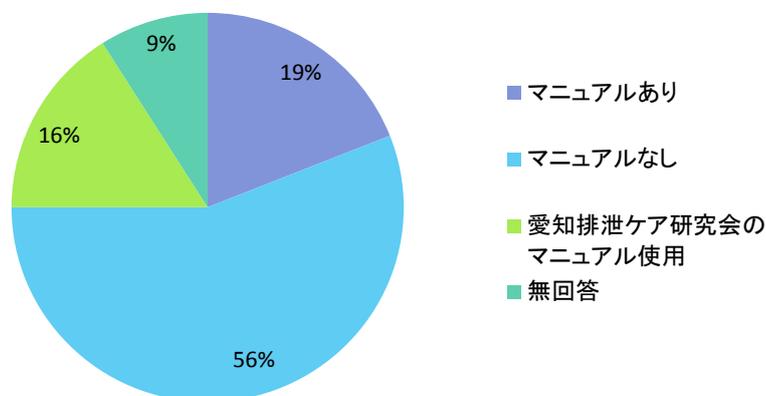
全国に先駆けて名古屋大学排泄情報センター・NPO 愛知排泄ケア研究会協同により実施されている排泄専門コメディカル養成事業において誕生した排泄機能指導士に協力をいただき、排泄ケアの有用性や制度の問題点などの把握を目的としてアンケート調査を行った。排泄機能指導士養成プログラムをうけて、そのプログラムについては約65%が役に立ったと答えていた。

排泄機能指導士養成講座は役に立ったか



その結果から、より専門的、そして標準化された排泄ケアに対する需要は高く、排泄機能指導士など専門性をもったスペシャリストの養成は必要であると思われた。ただ、現在わが国では、それぞれの自治体、団体レベルでは、そのような活動が普及しているところもあるが、認知度は低く、看護協会の認める認定看護師のような資格ではないことから、活動、その他の制限をとまなうことが多い。その点からも統一化された排泄機能指導士など専門性をもったスペシャリストの養成を全国レベルで行うことで、認知度が上がり、また公の機関（学会など）などで認定を受けやすくなり、結果としてより理想的な排泄ケアの実現につながるものと思われた。

排泄ケアに対するマニュアルに関しては、独自のマニュアルがあるとの回答が19%のみであったが、半数以上で排泄ケアに対するマニュアルが存在しておらず（図3）、77名（88.5%）が統一されたマニュアルがあった方がよいと回答した。以上から、専門性をもったスペシャリスト養成のためには基礎的な知識を集約して標準化された高齢者排泄ケアに関するマニュアルが必要と考えられた。



排泄ケアに関するマニュアルについて

上記の内容を学会で発表するとともに論文化した。また、名古屋大学排泄情報センターと NPO 愛知排泄ケア研究会の協力を得て、平成 24 年度に施行した本アンケート結果から、実際の排泄ケアで望まれている内容を集約した。この結果をもとに、NPO 法人愛知排泄研究会と共同して、標準的に望まれる高齢者に対する排泄ケアの内容を網羅し、排泄ケアマニュアルダウンロードサイト作成ならびに人材育成講習会用テキストの作成を開始した。

さらに作成したテキスト内容の検討、さらには様々な講習会などでの排泄ケアに対する教材としてふさわしいかなどの検討を行った。具体的には、排泄ケアに対するスペシャリスト（医師、看護師、介護士など）に、その内容を吟味していただき、正当性、妥当性の検討ならびに各項目の必要性、過不足の検討を行いテキストが完成した。

テキストの内容は以下の 23 項目に分類した。

1. 排尿障害の疫学・高齢者排尿障害の疫学
2. 高齢者排泄障害の管理・ケアの現状
3. 高齢者排尿管理・ケアにおける問題点
4. 蓄尿と排尿（尿排出）のメカニズム
5. 排尿機能に影響を及ぼす薬剤
6. 排尿障害の評価・検査法（医学的評価について）
7. 排尿障害の症状と原因
8. 前立腺肥大症
9. 神経因性膀胱
10. 尿失禁の分類と病態
11. 尿失禁の治療
12. 排便機能と排便機能障害の病態、ストーマ造設と合併症
- 12-2. ストーマケア
13. 高齢者の排便コントロールを行うために必要なアセスメントとケア判断
14. 排尿日誌の利用
15. 排泄用具の種類と選択
16. 吸収用具の特徴と理解
17. 尿道カテーテル管理の実際
18. 清潔簡潔導尿の実際
19. 骨盤底筋訓練
20. 留置カテーテルの必要性再評価と抜去方法
21. 排泄関連動作およびその介助法
22. 排泄ケアとスキンケア
23. ポジショニング

本テキストを名古屋大学排泄情報センター・NPO 愛知排泄ケア研究会協同により育成されている排泄機能指導士の 8 割を超える人から、内容がわかりやすい、実際の排泄ケアにおいて有用である、実践的な内容が多いとの結果を得た。ただ内容が多すぎる、専門的な内容でわかりづらいといった意見もみられ、今後の見直しの課題であると考えられた。さらに本年度は複数の病院（泌尿器科外来・病棟）、介護施設にテキストを配布し、排泄ケアの現場での有用性を評価した。病院、介護施設からは、スタッフの教育に有用であったという意見や、排泄ケアに対する共通の方法、認識がもてたとの意見、さらに、患者教育（自己導尿指導やスキンケア）においても有用であったという意見がみられ、実際の現場での、当テキストの有用性を確認することができた。また今後、当研究の完遂（高齢者排泄ケアに関わる人材育成システムの構築）のために、ソフト面の充実をはかる目的から、排泄ケアに関するマニュアルをセキュリティーの高いシステムサーバーを利用して、内容を電子媒体でいつでもダウンロードできるように周辺整備を整えた。

③ 地域基幹施設の役割の設定と各施設間の連携の確立（本間）

本研究で目指している、高齢者排泄管理センターの設立のために、現在地域で活動中の下記の各事業体に活動の実態、運営上の問題点等についてアンケート調査を実施した。

	事業名称	活動の主体 発端・前身
①	山形県排泄ケアマネジメント相談システム	大学(自治体補助あり) 山形県補助事業
②	山梨排泄問題を考える会	NPO法人 山梨排泄問題を考える会
③	高齢者排泄ケア改善事業	大学、NPO法人 愛知県委託事業
④	快適な排尿をめざす全国ネットの会	NPO法人 代表者自身
⑤	さぬき尿失禁懇話会	任意団体 香川医大泌尿器科
⑥	北九州排泄ケア事業	NPO法人(自治体補助あり) 北九州市専門委員会／北九州・筑豊排泄懇話会
⑦	佐賀県排泄ケアネット	大学→平成26年～NPO法人化 佐賀大学泌尿器科

地域の各事業体の特徴

事業体	HP	発足	資金	関係者	対象者	ケアの手段	マニュアル
山形	—	2003年	一部自治体 科学研究費 補助金など	23名 Dr 0名	高齢者	排泄ケアマネ ジメントマニ ュアルの活用	独自
山梨	○	2003年	なし	10名	高齢者	ケア実施なし	独自 複数のマニ ュアルを活用
愛知	○	2001年	会費 寄付金など	250名	高齢者 介護者	排泄障害のタ イプ別にケア の方法を指導	独自
京都	○	2005年	講演料 展示費用な ど	理事長1名 理事10名	高齢者 介護者	介護者 の指導、情報 交換の提供	独自 (排尿虎の巻)
讃岐	○	2000年	寄付 講演会参加 費など	Dr 25名 Ns 20名	介護者	グループワーク	独自
北九州	—	2007年	北九州市	25名	高齢者 介護者	電話相談 相談会 講演会 受診紹介	複数のマニ ュアルの組合せ
佐賀	○	2011年	佐賀県	18名	高齢者	医療機関への 紹介	ガイドラインの 活用

各事業体の現在の運営形態はNPO 4団体、大学2団体、任意団体1団体であった。主な活動の内容は、市民公開講座や勉強会の主催、事例検討、泌尿器科受診への橋渡しの役割などであった。排泄ケア専門員を養成する教育活動は4事業体で行われていた。活動資金が潤沢と言える事業体は無く、自治体からの出資、会員からの会費、講演会開催による収入などで賄われていた。活動の規模は小規模に行われている事業体がほとんどであり、セミナー等で得られる収入のほとんどは会場費や講師招聘料に充てられていた。受益者（高齢者・家族など）自身が費用を負担することは無く、各事業体のメンバーのボランティアにより維持されていた。排泄ケアマニュアルについては5つの事業体では目的に合わせて独自に開発したケアマニュアルを作成して運用していた。2事業体では複数の排尿関連ガイドラインを複数組み合わせ利用していた。高齢者排泄ケアセンターに対する意見では、「賛成」2件、「地域事業を発展させながらセンター設立を目指す」と良い」3件、「各地域で現在の活動を発展させる方が良い」1件、「その他」1件であった。排泄に関する知識・技術・教育の標準化、排泄ケア専門職養成、排泄ケア関連研究の促進・支援を行うセンター構想と地域サービスの両立が必要という意見が寄せられた。

上記の結果を論文化するとともに、上記各事業体の責任者との意見交換を行った。その結果、高齢者排泄ケアの重要性が地域の行政機関や医療者に十分周知されていない。医療・介護の垣根が高く、各領域の連携が難しい。事業体は資金難で運営が難しい。泌尿器科などの専門医との連携が困難。地域行政や医師会との連携が難しい。現在事業体で行っている取り組みが地域の排泄ケアのレベルアップに寄与できているのか検証ができていない。

排泄ケアに保険点数が付与されることが望ましいなどの意見が寄せられ、問題点が浮き彫りとなった。また、地域の各職種との連携のためのホームページの立ち上げを行った。

以上の結果を踏まえて、関連学会において高齢者排泄ケアシステムの構築および、さまざまな職種での排泄ケアに関する教育や職種間の連携の強化を目的とした2つのシンポジウムの開催に至った（第27回日本老年泌尿器科学会「高齢者排泄ケアシステムの整備に向けて」座長：鈴木、演者：吉田；第21回日本排尿機能学会「排泄ケアにおける多職種連携・人材育成の課題と展望」座長：吉田）。高齢者排泄ケアシステムの構築に関しては本研究で設立を予定している「高齢者排泄ケアセンター」の有用性が認識された。また、各職種間のみならず同一職種内でも教育内容や知識レベルに差があることが明らかとなり、実地臨床での職種間の連携や、有能なスタッフ育成のためには本研究で目指している統一された人材育成プログラムの重要性が指摘された。

平成26年度について

「高齢者排泄ケアマニュアル」の作成は以前に行ったアンケート調査の結果を参考としたが、可能な限りケアの実際に即した形とするために、Question and Answer形式とした。現在、図表やイラストなどの最終調整、索引の調整を行っており、近々製本過程に入る予定となっている。

ホームページの作成については、前年度の排泄機能指導士に対するアンケート調査および各地域の基幹施設に対するアンケート調査結果から、各地域、各職種間の交流は非常に重要であることが判明した。そのために、排泄ケアに関わる新たな情報の発信、各施設間や職種間での情報交換の促進やこの領域に関する研究の計画および支援を行うために活用できると思われるホームページを「高齢者排泄情報センター」を昨年度に作成した。今後その運用開始を予定している。また、来年度は作成した高齢者排泄ケアマニュアルや松川が担当した講習会用のテキストなどのホームページへの掲載を予定している。来年度からは各施設や職種からの意見や問い合わせの受付を開始して、それに対する回答などの対応を予定している。

講習会用のスライドの整備と講習会の開催については、講習会用のテキストを、分担研究者の松川が本年度の研究成果として作成した。本テキストを名古屋大学排泄情報センター・NPO 愛知排泄ケア研究会協同により実施されている排泄機能指導士の養成プログラムの8割を超える人から、内容がわかりやすい、実際の排泄ケアにおいて有用である、実践的な内容が多いとの結果を得た。ただ内容が多すぎる、専門的な内容でわかりづらいといった意見もみられ、今後の見直しの課題であると考えられた。さらに本年度は複数の病院（泌尿器科外来・病棟）、介護施設にテキストを配布し、排泄ケアの現場での有用性を評価した。病院、介護施設からは、スタッフの教育に有用であったという意見や、排泄ケアに対する共通の方法、認識がもてたとの意見、さらに、患者教育（自己導尿指導やスキンケア）においても有用であったという意見がみられ、実際の現場での、当テキストの有用性を確認

することができた。また今後、当研究の完遂（高齢者排泄ケアに関わる人材育成システムの構築）のために、ソフト面の充実をはかる目的から、排泄ケアに関するマニュアルをセキュリティの高いシステムサーバーを利用して、内容を電子媒体でいつでもダウンロードできるように周辺整備を整えた。

人材育成のための講習会の開催にあたっては、複数の講師による講習会を予定しているため、講習の内容が異なることにより、知識や情報の均一化、ひいてはケアの均一化が行われなくなる可能性がある。そのため、ある程度の基本的なスライドは整備しておく必要があると考え、新たに作成を行うとともに、分担研究者や協力者からスライドの提供を受け、その整備を行い、講習会用のスライドも作成した。これらのテキストやスライドを用いて、本年度は「困った症例に対する症例検討会」を行うとともに、近隣地域・施設・病院の職員を対象とした高齢者の排尿ケアに関する第1回講習会を行った。この講習会では泌尿器科医師から排尿のしくみ、排尿障害について、看護師からは排尿のアセスメント、排尿ケアについての講義を行った。また、終了時に参加者に対するアンケート調査をおこなった。

アンケート調査の結果、参加者は57名で、そのうちアンケートの回答が得られたのは45名であった。対象者職種は、看護師21名、介護職12名、ケアマネージャー7名、ヘルパー2名、医師1名。当該職種の経験年数は、1から5年が8名、6年から10年が11名、11年から15年が10名、16年から20年が6名、20年以上が6名。講習会の内容の理解度は、理解できた29名、どちらとえば理解できた14名。講習会の内容が現場で役に立つかは、役に立つが24名、どちらとえば役に立つが18名。職種間と経験年数で、理解度や現場で役に立つかの質問に差はなかった。

施設間および多職種間の連携を促進するために、関連学会において高齢者排泄ケアシステムの構築および、さまざまな職種での排泄ケアに関する教育や職種間の連携の強化を目的とした2つのシンポジウムの開催に至った（第27回日本老年泌尿器科学会「高齢者排泄ケアシステムの整備に向けて」座長：鈴木、演者：吉田；第21回日本排尿機能学会「排泄ケアにおける多職種連携・人材育成の課題と展望」座長：吉田）。高齢者排泄ケアシステムの構築に関しては本研究で設立を予定している「高齢者排泄ケアセンター」の有用性が認識された。また、各職種間のみならず同一職種内でも教育内容や知識レベルに差があることが明らかとなり、実地臨床での職種間の連携や、有能なスタッフ育成のためには本研究で目指している統一された人材育成プログラムの重要性が指摘された。

D. 考察

排泄は摂食、嚥下とならぶ生活動作の基本であり、その自立は高齢者の尊厳の維持、生活の質(QOL)の保持においてきわめて重要な課題である。超高齢化社会の我が国において、施設・在宅での看護・介護を支える上で、排泄管理の意義は高く、それをいかに実践していくかは重要である。ただ、その対応については施設間でまちまちであり、適切に施行さ

れていないことも多い。不適切な排泄管理は、離床の阻害、廃用症候群の進行、寝たきり状態への移行の要因となる。特に認知症患者においては、本人のみならず介護者の QOL も障害し、寝かせきりや介護放棄といった問題への進展も懸念される。一方、適切で積極的な排泄管理は、排泄のケアのみならず、高齢者の心身機能の維持あるいは改善、寝たきりの防止などに有効であると考えられる。

排泄ケアを有効に行うためには、排泄ケアの具体的な内容を科学的見地から分析し、高齢者が可能な限り排泄を自立し、QOL が維持できるよう、老人保健施設や在宅で適切な排泄ケア基準（高齢者排泄ケアマニュアルなど）の作成を行うとともに、人材育成を行い、また、地域特性を生かした地域の事業者が有効に機能できるように支援体制や地域間、職種間の連携を強化することも必要であり、本研究の意義は大きいと考えられる。

1. 高齢者排泄ケア基準の設定について

昨年度の老人保健施設や訪問看護ステーションにおける排泄ケアの現況に関する調査で、おむつ使用の約 40%が「尿失禁予防のため」、あるいは「トイレ排尿可能であるが尿失禁あり」のなどの理由で行われており、これらは適切な排泄ケアを行うことによりおむつ外しが可能ではないかと考えられた。

また、おむつの使用を決定するときの基準や間欠導尿の実施基準、尿道留置カテーテルの実施や抜去基準については一定のマニュアルなどを使用している施設は少なく、一定の基準を設定することが必要であろうと考えられ、マニュアル作成の必要性を示していた。

明らかにされたこれらの老人保健施設や訪問看護ステーションにおける排泄ケアの現況と問題点をもとに全国的に使用可能な高齢者排泄ケアに関する標準指針（マニュアル）の作成を行った。この領域ではいくつかのマニュアルやガイドラインが存在しているが、どの程度使用されているか、内容が実用的であるかは疑問も多い。そのため、実際のケアに即した Question and Answer 形式を取り入れたマニュアルを目指した。また、人材育成のための講習会で使用するスライド整備や地域や職種間の連携のためのホームページの作成を行うことで、本研究が最終的に目指している「高齢者排泄ケアセンター」の設立に向けた準備が整いつつあると考えられた。ただ、ホームページについては、まだ運用までには至っていない。当初は前述の「高齢者排泄ケアマニュアル」をホームページ上にアップすることを目的としていたために、この作成の遅れが、ホームページの運用の遅れにも関係していると考えられた。また、運用に際して病院のホームページからのリンクに関する問題や、アクセスに対する適切な制限などに関して解決すべき問題が多いことも原因と考えられる。なるべく早期に、これらの問題点を解決するとともに、運用を開始したいと考えている。

高齢者排泄ケアを行うためには関係する看護師、介護士などの人材育成、教育が重要であることは周知の事実である。このため講習会の参考となるべきテキストを共同研究者の松川が作成した。また、我々は基礎的な講習の内容を含んだスライドを作成した。これら

のツールはこれからの講習会で活用することでスムーズな講習会の運営が可能となると考えられる。また、今年度は近隣地域の看護師、介護士、ケアマネージャーなどを対象とした、高齢者排泄障害とそのケアに関する第1回講習会を開催できた。本講習会は基礎的な内容の講習会であり、どの職種でも理解でき、現場で役に立つ内容との評価であり、開催の有用性が示された。今後はさらに他の多職種を交えて、基礎から実際の現場で役立つ知識、技術の習得できる内容に発展させていくことを予定している。

2. 高齢者の排泄ケアに関わる人材育成に関して

名古屋大学排泄情報センター・NPO 愛知排泄ケア研究会により実施されている、排泄専門コメディカル養成事業において、過去10年間に排泄機能指導士として養成・認定され、現場で活動を行っている排泄機能指導士に対するアンケートで、実際の現場では排泄ケアに対するマニュアルはないことが多く、77名(88.5%)が統一されたマニュアルがあった方がよいと回答していた。

また、排泄ケアの実践においてどのレベルまで施行しているかの質問に対して、「排泄ケアが実践できていない」という回答は12%みられ、また排泄状況の把握、問題点の抽出はできて、ケアまで実践できているという回答は少なく、より実践的な排泄ケアが求められていることが示唆される結果であった。さらに排泄ケア実践における不明点については90%以上の方が、「ある」と回答しており、排泄機能指導士養成プログラムをうけた後も、実際の現場では多くが、「排泄ケアに対して迷っている」、「悩んでいる」との結果であった。

このような状況を打開し、質の高い、介護・看護師にストレスのかからない排泄ケアを実現することは、急速な勢いで高齢化社会をむかえている本邦においては喫緊の課題であり、全国レベルでの標準化された高齢者排泄ケアセンターの設立ならびに排泄ケアにおけるソフト面の充実も必要である。先に紹介したアンケート結果を踏まえて、専門的な排泄ケアを行える人材育成のためには共通のテキストが必要であると判断し、本研究においてその作成を試みた。作成されたテキストはより実践的な排泄ケアの実現を目指して、実際のケアにおいて生じる疑問や悩みが解決できるように作成されており、人材育成のための講習会での使用や実地ケアでの利用に有用であると考えられた。

さらに新しい情報の発信や多様なケアに関する相談に関する対応を期待する意見も多く、情報交換や相談窓口としてインターネットなどの活用が望まれ、作成したテキスト内容の検討、さらには様々な講習会などでの排泄ケアに対する教材としてふさわしいかなどの検討は重要であり、排泄ケアに対するスペシャリスト(医師、看護師、介護士など)により、各項目の必要性、過不足の検証が行われ、テキストの正当性と妥当性が証明された。また、このテキストを活用して、前述したように、近隣地域の看護師、介護士、ケアマネージャーなどを対象とした、高齢者排泄障害とそのケアに関する第1回講習会を11月に開催できたことは意義深いと思われ、今後も講習会を継続していく予定である。

3. 各地域で高齢者排泄ケアを行う排泄ケア事業体の活動把握

活動中の7事業体の発足の経緯では、いずれの事業体でも高齢者の排泄ケアに関心の高い医療従事者が自発的に事業を興しており、その志の高さは共通していた。事業体の中には地方自治体の委託事業として発足したものもあった。しかし、そのような場合でも行政からの支援が充足しているとは言い難く、どの事業体も運営は容易ではないことが明らかとなった。

事業の継続という点では、多くの事業体が10年程度の活動を続けていた。しかし、その間にコアメンバーが一時的に目標を見失って事業を休止したケースもあった。活動を促進する方策として、いくつかの事業体では独自の資格を研修参加者に付与している。しかし、それは公的な資格ではなく、研修者の実利にも繋がっていなかった。

関連学会において高齢者排泄ケアシステムの構築および、さまざまな職種での排泄ケアに関する教育や職種間の連携の強化を目的とした2つのシンポジウムの開催に至ったことは意義深いと思われる。シンポジウムでは高齢者排泄ケアシステムの構築に関しては本研究で設立を予定している「高齢者排泄ケアセンター」の有用性が認識され、今後は高齢者排泄ケアの確立に向けて、関連学会（日本泌尿器科学会、日本排尿機能学会、日本老年泌尿器科学会など）との協力体制の確立が期待される。また、各職種間のみならず同一職種内でも教育内容や知識レベルに差があることが明らかとなり、実地臨床での職種間の連携や、有能なスタッフ育成の重要性が認識され、本研究で目指している統一された人材育成プログラムの重要性が指摘された。

今後の方策としては、指導や実際の支援活動の内容に工夫を図ると共に、最終的な受益者のアウトカムを評価し、排泄ケア事業により高齢者の排泄状態やQOLが改善することを社会や行政に伝える努力が最も肝要と考えられた。高齢者が健康的で清潔な排泄を維持するために排泄ケアマネジメントが有効であることが明確に示されるならば、公的な社会事業に発展する機運が高まり、各事業体の目的も達成されやすくなるであろう。そのためには関連学会が要となって関与するとともに、標準化したケアの普及を図るためにも中心となるセンターが必要と思われた。

E. 結論

これまでの全国の老人健康施設や訪問看護ステーションの実態調査、名古屋大学排泄情報センター・NPO 愛知排泄ケア研究会で育成された排泄機能指導士に対するアンケートの結果を踏まえて、高齢者排泄ケアマニュアルの作成、情報発信、情報交換用のホームページの立ち上げ、人材育成のための講習会で使用するテキストの作成およびスライドの整備を行った。また、作成したテキストやスライドを用いての近隣の看護師、介護士、ケアマネジャーを対象とした人材育成のための講習会を開催した。高齢者排泄ケアの確立には地域間、職種間の連携は不可欠であり、さまざまな地域事業体の特性を調査した。また、学会のシンポジウムにおいて事業体調査の利点や問題点を明らかにし、各職種における人材

育成のための教育と職種間連携について議論を行った。今後はこれらの研究成果をもとにして「高齢者排泄ケアセンター」設立の準備を進めてゆく予定である。さらに、我々の取り組みを公的な社会事業に発展させるために、排泄ケアの方法論の確立と、その有効性の検証が喫緊の課題であると思われる。

F. 健康危険情報

なし

G. 研究発表

1. 論文発表

平成24年度

- 1) Yoshida M, Kudoh J, Homma Y, Kawabe K: New clinical evidence of silodosin, an α_{1A} selective adrenoceptor antagonist, in the treatment for lower urinary tract symptom. *Int J Urol* 19: 306-316, 2012
- 2) 吉田正貴、影山慎二、川原和也、曾根淳史、工藤惇三：実地診療における女性の過活動膀胱に対する β_3 アドレナリン受容体作動薬（ミラベグロン）の有用性の検討 泌尿器外科 254:725-732, 2012
- 3) 影山慎二、吉田正貴：女性過活動膀胱に対する抗コリン剤による排尿症状の推移とQOLの変化について—Bother 質問票を用いた検討— 泌尿器外科 25:361-368, 2012
- 4) 吉田正貴、後藤百万、山上英臣、本間之夫：泌尿器科・一般内科医および患者における過活動膀胱治療の認識 泌尿器外科 25:2425-2434, 2012
- 5) 吉田正貴、武田正之、高橋悟、西澤理、後藤百万、榊森直哉：夜間頻尿を有する過活動膀胱患者に対するイミダフェナシンの効果に及ぼす夜間排尿回数の影響 泌尿器外科 32:2181-2187, 2012
- 6) 吉田正貴 “一般医における前立腺肥大症診療の現況 第100回日本泌尿器科学会総会シンポジウム「前立腺肥大症治療を再考する」から” *メディカル朝日* 9:36-37, 2012
- 7) 吉田正貴、佐野 太、後藤百万（司会）：前立腺肥大症治療における患者満足度の向上をめざして（座談会） 泌尿器外科 25:41-48, 2012
- 8) 吉田正貴、野尻佳克、大菅陽子：抗コリン剤・コリン作動薬、前立腺肥大症の診療最前線—薬物療法を中心に— *Modern Physician* 32:1489-1492, 2012
- 9) 鈴木基文、藤村哲也、福原浩、榎本 裕、西松寛明、久米春喜、本間之夫、井川靖彦、湖山泰成、井口靖浩：高齢者排尿自立支援（第一報）. *日本老年泌尿器科学会誌* 25:52, 2012.
- 10) Fujimura T, Kume H, Nishimatsu H, Sugihara T, Nomiya A, Tsurumaki Y, Miyazaki H, Suzuki M, Fukuhara H, Enomoto Y, Homma Y. Assessment of lower urinary tract symptoms in men by international prostate symptom score and core lower urinary

- tract symptom score. *BJU Int* 109:1512-1516, 2012.
- 11) Nakamura M, Fujimura T, Nagata M, Hosoda C, Suzuki M, Fukuhara H, Enomoto Y, Nishimatsu H, Kume H, Igawa Y, Homma Y. Association between lower urinary tract symptoms and sexual dysfunction assessed using the core lower urinary tract symptom score and International Index of Erectile Function-5 questionnaires. *Aging Male* 15:111-114, 2012.
 - 12) Fujimura T, Kume H, Nishimatsu H, Sugihara T, Nomiya A, Tsurumaki Y, Miyazaki H, Suzuki M, Fukuhara H, Enomoto Y, Homma Y. Assessment of lower urinary tract symptoms in men by international prostate symptom score and core lower urinary tract symptom score. *BJU Int.* 109:1512-1516, 2012.
 - 13) 本間之夫：【泌尿器科の変遷-過去から未来へ-】 排尿障害 排尿障害 特に尿失禁の病態と治療の変遷. *泌尿器外科* 25:508-509, 2012.
 - 14) Matsukawa Y, Hattori R, Sassa N, Yamamoto T, Gotoh M: What are the factors contributing to failure in improvement of subjective symptoms following silodosin administration in patients with benign prostatic hyperplasia? Investigation using pressure-flow study. *Neurourol Urodyn.* 32(3):266-70, 2013.
 - 15) Matsukawa Y, Gotoh M, Komatsu T, Funahashi Y, Sassa N, Hattori R: Efficacy of silodosin for relieving benign prostatic obstruction: prospective pressure flow study. *J Urol* 189(Suppl):S117-121, 2013

平成25年度

- 1) Staskin D, Kelleher C, Bosch R, Cotterill N, Coyne K, Kopp Z, Rosenberg M, Symonds T, Tannenbaum C, Yoshida M, Basra C, Cherian P: Initial Assessment of Urinary Incontinence in Adult Male and Female Patients. "Incontinence 5th Edition 2013" 363-388, 2013 ICUD-EAU 2013
- 2) 吉田正貴、オケ・ヒルマン：シリーズ「コンチネンスケア」を考える II QOL向上のためにいま日本で動き始めた排泄ケアの変革 *月刊ナーシング* 33(10):94-95, 2013
- 3) 吉田正貴、大菅陽子、野尻佳克：一般男性における下部尿路症状の悩みと医療機関への受診に関する調査 *泌尿器外科* 26: 1461-1466, 2013
- 4) 吉田正貴、野尻佳克、大菅陽子、横山剛志、本間之夫、鈴木基文、松川宣久、後藤百万：高齢者排尿障害に対するケアの現状. *日本老年泌尿器科学会誌* 26, 115-117, 2013
- 5) 吉田正貴、野尻佳克、大菅陽子、横山剛志、本間之夫、鈴木基文、松川宣久、後藤百万：高齢者排泄ケアセンターの必要性に関する検討. *日本老年泌尿器科学会誌* 26, 119-120, 2013
- 6) 吉田正貴：過活動膀胱の疫学と診断 *日本医師会雑誌* 142(11):2419-2423, 2014
- 7) 吉田正貴：過活動膀胱の病態と診断法 *泌尿器ケア* 19(1):66-71, 2014

- 8) 吉田正貴、大菅陽子、野尻佳克、永田卓士：過活動膀胱に関する疫学調査 泌尿器外科 27(3)：399-403, 2014
- 9) 鈴木基文、本間之夫、松川宜久、後藤百万、野尻佳克、横山剛志、吉田正貴：本邦における高齢者尿失禁ケア支援拠点の現状 日本老年泌尿器科学会誌 26：121-124, 2013.
- 10) 本間之夫、武田正之、朝倉博孝、井川靖彦、柿崎秀宏、河邊香月、後藤百万、小柳知彦、関戸哲利、高橋 悟、武井実根雄、西澤 理、山西友典、横山 修、吉田正貴、山上英臣、山口 脩：LUTS の最近の知見と展望—LUTS Expert Forum の総括から今後を考える— 泌尿器外科 26(11)：1701-1709, 2013
- 11) Matsukawa Y, Hattori R, Sassa N, Yamamoto T, Gotoh M.: What are the factors contributing to failure in improvement of subjective symptoms following silodosin administration in patients with benign prostatic hyperplasia? Investigation using a pressure-flow study. Neurourol Urodyn. 32(3):266-70, 2013.
- 12) Matsukawa Y, Gotoh M, Komatsu T, Funahashi Y, Sassa N, Hattori R.: Efficacy of silodosin for relieving benign prostatic obstruction: prospective pressure flow study. J Urol. 189:117-21, 2013.
- 13) 松川宜久、後藤百万、本間之夫、鈴木基文、吉田正貴：高齢者排泄ケアセンターの設立を目指した人材育成システムの開発に関する研究—排泄機能指導士へのアンケート調査からわかったこと— 日本老年泌尿器科学会誌 26：125-129, 2013

平成26年度

- 1) 吉田正貴 膀胱血流の悪化を防ぐ治療のポイント Clinic Magazine 41(10)：32-34, 2014.
- 2) 山口 脩、吉田正貴、奥村広之、加藤大輔、安田大嗣 日本人過活動膀胱患者における過活動膀胱治療薬の有効性と安全性—プラセボ対照無作為化比較試験のメタ解析— 泌尿器外科 27(10)：1731-1744, 2014
- 3) 吉田正貴 下部尿路症状 (LUTS) の診療におけるかかりつけ医の役割 Geriatric Medicine 52(9)：1079-1082, 2014
- 4) 吉田正貴 高齢者排尿障害の病態と症状 WOC Nursing 2(8)：14-21, 2014
- 5) 吉田正貴、永田卓士、野尻佳克、大菅陽子 蓄尿障害治療薬—抗コリン薬の作用メカニズムと各種抗コリン薬の特徴— 泌尿器外科 27(7)：1049-1054, 2014
- 6) Yamaguchi O, Marui E, Kakizaki H, Homma Y, Igawa Y, Takeda M, Nishizawa O, Gotoh M, Yoshida M, Yokoyama O, Seki N, Ikeda Y, Ohkawa S. Phase III, randomised, double-blind, placebo-controlled study of the β 3-adrenoceptor agonist mirabegron, 50 mg once daily, in Japanese patients with overactive bladder BJU Int. 113(6)：951-960, 2014

- 7) Funahashi Y, Yoshida M, Yamamoto T, Majima T, Takai S, Gotoh M. Intravesical application of rebamipide suppresses bladder inflammation in a rat cystitis model. *J Urol.* 191:1147-52, 2014
- 8) Funahashi Y, Yoshida M, Yamamoto T, Majima T, Takai S, Gotoh M. Intravesical Application of Rebamipide Promotes Urothelial Healing in a Rat Cystitis Model *J Urol.* 192(6): 1864-1870, 2014
- 9) 吉田正貴、巴ひかる 知って得する！新名医の最新治療 女性の尿失禁 週刊朝日 2014.6.27号 73-75, 2014
- 10) Yoshida M, Yamaguchi O: Detrusor Uneractivity: The Current Concept of the Pathophysiology LUTS 6:131-137, 2014
- 11) Ogama N, Yoshida M, Nakai T, Niida S, Toba K and Sakurai T. Frontal white matter hyperintensity predicts lower urinary tract dysfunction in older adults with amnesic mild cognitive impairment and Alzheimer' s disease. *Geriatr Gerontol Int, On line*, 2015,
- 12) Yamaguchi O, Kakizaki H, Homma Y, Igawa Y, Takeda M, Nishizawa O, Gotoh M, Yoshida M, Yokoyama O, Seki N, Okitsu A, Hamada T, Kobayashi A, Kuroishi K. Safety and efficacy of mirabegron as add-on therapy in patients with overactive bladder treated with solifenacin: a postmarketing, open-label study in Japan (MILAI study). *BJU Int. On line*, 2015
- 13) Yokoyama O, Yamaguchi A, Yoshida M, Yamanishi T, Ishizuka O, Seki N, Takahashi S, Yamaguchi O, Higo N, Minami H, Masegi Y. Once-daily oxybutynin patch improves nocturia and sleep quality in Japanese patients with overactive bladder: Post-hoc analysis of a Phase III randomized clinical trial. *Int J Urol, On line*, 2015
- 14) Nishizawa O, Yoshida M, Takeda M, Yokoyama O, Morisaki Y, Murakami M, Viktrup L. Tadalafil 5 mg once daily for the treatment of Asian men with lower urinary tract symptoms secondary to benign prostatic hyperplasia: analyses of data pooled from three randomized, double-blind, placebo-controlled studies. *Int J Urol. On line*, 2015
- 15) Nishimatsu H, Kitamura T, Yamada D, Nomiya A, Niimi A, Suzuki M, Fujimura T, Fukuhara H, Nakagawa T, Enomoto Y, Kume H, Igawa Y, Homma Y. Improvement of symptoms of aging in males by a preparation LEOPIN ROYAL (R) containing aged garlic extract and other 5 of natural medicines - Comparison with traditional herbal medicines (Kampo) - *Aging Male* 17: 112-116, 2014.
- 16) Niimi A, Igawa Y, Fujimura T, Suzuki M, Mihara M, Koshima I, Homma Y. Midurethral autologous fascial sling surgery with reconstruction of the lower abdominal wall using the tensor fascia lata muscle flap for post-hemipelvectomy stress urinary

- incontinence. *Int J Urol*. 21: 949-951, 2014.
- 17) Iwatsubo E, Suzuki M, Igawa Y, Homma Y. Individually tailored ultrasound-assisted prompted voiding for institutionalized older adults with urinary incontinence. *Int J Urol* 21: 1253-1257, 2014.
 - 18) Aizawa N, Ito H, Sugiyama R, Fujimura T, Suzuki M, Fukuhara H, Homma Y, Igawa Y. Selective inhibitory effect of imidafenacin and 5-hydroxymethyl tolterodine on capsaicin-sensitive C-fibers of the primary bladder mechanosensitive afferent nerves in the rat. *J Urol*. 2014, in press
 - 19) 本間之夫：特集 高齢者における排尿障害 序文. (Geriatric Medicine Vol. 52, No. 9, p1023-10624, ライフ・サイエンス, 東京) 2014年9月
 - 20) 鈴木基文：特集 高齢者における排尿障害 Seminar 6. 要介護高齢者の尿失禁対策. (Geriatric Medicine Vol. 52, No. 9, p1063-1067, ライフ・サイエンス, 東京) 2014年9月
 - 21) Ito H, Aizawa N, Fujita Y, Suzuki M, Fukuhara H, Homma Y, Kubota Y, Ito M, Andersson KE, Igawa Y. Long-term caloric restriction in rats prevents age-related impairment of bladder function. *J Urol* 2014, in press.
 - 22) Fujimura T, Yamada Y, Sugihara T, Azuma T, Suzuki M, Fukuhara H, Nakagawa T, Kume H, IGAWA Y, Homma Y. Nocturia in men: a chaotic condition dominated by nocturnal polyuria. *Int J Urol* 2014, in press.
 - 23) Matsukawa Y, Takai S, Funahashi Y, Yamamoto T, Gotoh M. Urodynamic evaluation of the efficacy of mirabegron on storage and voiding functions in women with overactive bladder. *Urology*. 85: 786-90, 2015.
 - 24) Matsukawa Y, Gotoh M, Kato M, Funahashi Y, Narita M, Mitsui K. Effects of dutasteride on storage and voiding symptoms in male patients with lower urinary tract symptoms as a result of benign prostatic obstruction: the 1-year outcomes from a prospective urodynamic study. *Int J Urol*. 21:826-30, 2014.

2. 学会発表

平成24年度

- 1) 吉田正貴：LUTS/BPH 治療に患者は何を求めているか？ 第100回日本泌尿器科学会総会 サテライトセミナー 横浜市 2012.4.21
- 2) 吉田正貴、工藤惇三：一般医における前立腺肥大症治療の再考—主に薬物療法について— 第100回日本泌尿器科学会総会 シンポジウム 横浜市 2012.4.23
- 3) 吉田正貴：BPH患者の治療満足度、BPH治療の現状と課題 第62回日本泌尿器科学会中部総会 シンポジウム 富山 2012.11.1
- 4) 吉田正貴：QOL改善を目指した夜間頻尿の治療 第25回日本老年泌尿器科学会 ラン

チョンセミナー 徳島市 2012. 6. 1

- 5) 吉田正貴：生活習慣病と過活動膀胱～一般医に通院中の40歳以上の女性患者の実態調査から～ 第19回日本排尿機能学会 ランチョンセミナー 名古屋 2012. 8. 31
- 6) 大菅陽子、吉田正貴、下方浩史、安藤富士子：メタボリック症候群はLUTSの危険因子となるか—4年間の縦断的研究— 第19回日本排尿機能学会 名古屋 2012. 8. 30
- 7) 野尻佳克 吉田正貴 岡村菊夫：monopolar-TURPの切除と止血のバランス 第26回日本泌尿器内視鏡学会総会 仙台 2012. 11. 23
- 8) 大菅陽子、吉田正貴、下方浩史、安藤富士子：夜間頻尿発生と一日平均歩数との関連—地域在住中高齢者における4年間の縦断的研究— 第62回日本泌尿器科学会中部総会 富山 2012. 11. 3
- 9) 吉田正貴：排泄障害について 第8回「知多地域認知症・看護研修会」—認知症患者様とともに歩む会 知多郡 2012. 12. 15
- 10) 鈴木基文 高齢者排尿自立支援（第一報）第25回日本老年泌尿器科学会 徳島 2012. 6. 1
- 11) Suzuki M: Risk factors of diaper/pad-use for urinary incontinence in elderly nursing home residents in Japan. International Continence Society 2013 Beijing
- 12) 本間之夫：高齢者の排尿障害 東京大学政策ビジョン研究会 2012. 10. 29
- 13) 鈴木基文：高齢化社会における尿失禁問題について 第59回Tokyo Expert Urology Seminar 2013. 2. 25
- 14) 松川宣久、後藤百万：前立腺肥大症に対する手術治療～薬物治療新時代におけるその適応と役割を再考する 第100回日本泌尿器科学会総会シンポジウム 2012. 4. 23 横浜

平成25年度

- 1) 横山剛志、野尻佳克、吉田正貴、原田 敦 大腿骨近位部骨折術後の退院時尿失禁の危険因子についての検討 第26回日本老年泌尿器科学会 横浜 2013. 5. 17
- 2) Yoshida M, Yamaguchi O, Otani M New classification of lower urinary tract symptoms in female patients visiting to primary care doctors: cluster analysis using the International Prostate Symptom Score ICS 2013 Barcelona, 2013. 8. 30
- 3) 吉田正貴、大菅陽子、野尻佳克、本間之夫、鈴木基文、後藤百万、松川宣久 高齢者の排尿管理に関する実態調査—老人健康施設、特別養護老人ホームなどでの排尿管理について— 第20回排尿機能学会 浜松 2013. 9. 19
- 4) 横山剛志、野尻佳克、吉田正貴、原田 敦：大腿骨近位部骨折術後の尿排出障害とADLの関連についての検討 第20回排尿機能学会 浜松 2013. 9. 19
- 5) 吉田正貴：F-LUTSの治療～薬物療法を中心に～ 第20回排尿機能学会 イブニングセミナー 浜松 2013. 9. 20

- 6) 吉田正貴、野尻佳克、大菅陽子、榊永浩一、永田卓士、稲留彰人、宮本 豊、工藤惇三：男性の排尿の悩みに関する調査—生活習慣病との関係— 第20回排尿機能学会 浜松 2013.9.20
- 7) 吉田正貴、大谷将之、米納 誠、山口 脩：生活習慣病を有する女性の下部尿路症状(LUTS)に関する検討—クラスター解析によるLUTS発現パターン— 第20回排尿機能学会 浜松 2013.9.20
- 8) 大菅陽子、吉田正貴、下方浩史、大塚 礼、安藤富士子：地域在住の中高齢者における余暇身体活動の有無と4年後の夜間頻尿発生との関連についての検討 第20回排尿機能学会 浜松 2013.9.21
- 9) Osuga Y, Yoshida M, Otsuka R, Ando F, Shimokata H: An evaluation for the relationship between daily steps and nocturia. - Results of 4 year longitudinal study - The 8th Pan-Pacific Continence Society Meeting. Busan, Korea 2013.9.27
- 10) Suzuki M.: Socioeconomical effect of bladder functional assessment-based optimal prompted voiding care for institutionalized elderly with urinary incontinence in Japan. 43rd International Continence Society 2013. Barcelona, Spain, 2013.8.29
- 11) 鈴木基文：高齢者排尿自立支援—尿失禁とどう向き合うか？ 第20回日本排尿機能学会 浜松 2013.9.20
- 12) 松川宜久、後藤百万、吉田正貴：高齢者排泄ケアセンターの設立にあたっての人材育成システムの開発に関する研究 ～平成24年度長寿医療研究から～ 第20回日本排尿機能学会 2013.9.19 静岡

平成26年度

- 1) 大谷将之、米納 誠、吉田正貴 早朝排尿と血圧の関係～多変量解析による検討 第21回日本排尿機能学会 岡山 2014.9.20
- 2) 舟橋康人、吉田正貴、山本徳則、松川宜久、高井 峻、後藤百万 膀胱炎症モデルにおけるレバミピド膀胱注入療法 第21回日本排尿機能学会 岡山 2014.9.20
- 3) 吉田正貴 女性OABの治療戦略 第21回日本排尿機能学会 イブニングセミナー 岡山 2014.9.19
- 4) 榊永浩一、永田卓士、吉田正貴、津久井和貴、本間之夫、粕谷 豊 過活動膀胱を有する高齢者に対するフェソテロジンの有効性の検討 第21回日本排尿機能学会 岡山 2014.9.19
- 5) 横山剛志、野尻佳克、藤井美保子、吉田正貴 尿道留置カテーテル抜去後の尿閉リスクの検討 第21回日本排尿機能学会 岡山 2014.9.19
- 6) 野尻佳克、永田卓士、吉田正貴 尿閉の発生契機に関する検討 第21回日本排尿機能学会 岡山 2014.9.19
- 7) 榊永浩一、堀田晴美、渡辺信博、金 憲経、宮崎彰吾、飯村佳織、津久井和貴、永田

- 卓士、鈴木基文、本間之夫、粕谷 豊 夜間頻尿に対する非侵襲的皮膚刺激の効果 第 21 回日本排尿機能学会 岡山 2014. 9. 19
- 8) 山口 脩、井川靖彦、柿崎秀宏、後藤百万、関 成人、武田正之、西澤 理、本間之夫、横山 修、吉田正貴、興津 彰、濱田拓也、小林亜希子、黒石健太郎 ソリフェナシンで治療中の過活動膀胱患者に対するミラベグロン併用の安全性と有効性に関する検討-MILAI study- 第 21 回日本排尿機能学会 岡山 2014. 9. 18
- 9) 吉田正貴、後藤百万、影山慎二、加藤久美子、松川宜久、成島雅博、N-QOL 研究グループ 夜間頻尿を有する女性過活動膀胱患者におけるミラベグロンの有用性と QOL への影響についての検討 第 21 回日本排尿機能学会 岡山 2014. 9. 18
- 10) 吉田正貴、永田卓士、大菅陽子、野尻佳克 過活動膀胱に関するインターネットによるアンケート調査 (第 2 報) 第 21 回日本排尿機能学会 岡山 2014. 9. 18
- 11) 吉田正貴 全国的ネットワークの確立に向けて―「高齢者排泄ケアセンター」の設立に向けての取り組み― 第 27 回日本老年泌尿器科学会 シンポジウム 山形 2014. 6. 14
- 12) 横山剛志、野尻佳克、藤井美保子、吉田正貴、口ノ町まゆみ、星山明代 14 日以内に尿道留置カテーテル抜去した患者の尿閉 第 27 回日本老年泌尿器科学会 山形 2014. 6. 14
- 13) 藤井美保子、横山剛志、口ノ町まゆみ、星山明代、野尻佳克、吉田正貴 当院における尿道留置カテーテル使用の実態調査 第 27 回日本老年泌尿器科学会 山形 2014. 6. 14
- 14) 野尻佳克、大菅陽子、吉田正貴 他科入院中に発見された尿排出障害の回復期間 第 27 回日本老年泌尿器科学会 山形 2014. 6. 13
- 15) 吉田正貴 高齢者の排尿障害とケア 第 56 回日本老年医学会学術集会・総会 教育講演 福岡 2014. 6. 13
- 16) 吉田正貴、山口 脩、大谷将之、米納 誠、稲留彰人 女性の下部尿路症状 (LUTS) の国際前立腺症状スコアを用いたクラスター解析 ―各クラスターの特徴 第 102 回日本泌尿器科学会総会 神戸 2014. 4. 27
- 17) 大谷将之、米納 誠、吉田正貴 早朝頻尿と血圧の関係の男女差の検討 第 102 回日本泌尿器科学会総会 神戸 2014. 4. 27
- 18) 吉田正貴、後藤百万、本間之夫 泌尿器科・一般内科医および患者における過活動膀胱 (OAB) 治療の認識についての検討―患者の性別による解析― 第 102 回日本泌尿器科学会総会 神戸 2014. 4. 26
- 19) 吉田正貴、野尻佳克、大菅陽子、永田卓士、宮本 豊、工藤惇三 過活動膀胱に関するインターネットによるアンケート調査 第 102 回日本泌尿器科学会総会 神戸 2014. 4. 26
- 20) 吉田正貴 抗コリン薬抵抗性の機序 第 102 回日本泌尿器科学会総会 シンポジウム

神戸 2014. 4. 25

- 21) 野尻佳克、大菅陽子、吉田正貴 虚弱高齢者の尿管結石に伴う急性閉塞性腎盂腎炎の検討 第102回日本泌尿器科学会総会 神戸 2014. 4. 25
- 22) 舟橋康人、吉田正貴、山本徳則、松川宣久、高井 峻、後藤百万 レバミピドの膀胱注入による膀胱粘膜保護作用 第102回日本泌尿器科学会総会 神戸 2014. 4. 24
- 23) Yoshida M, Takeda M, Nishizawa O, Gotoh M, Takahashi S, Masumori N Relationship between nocturnal bladder capacity and nocturia in BPH/OAB patients with alpha1-blocker and anticholinergic treatment: Post-hoc analysis of addition study. 29th Annual EAU Congress Stockholm 2014. 4. 14
- 24) Yoshida M, Osuga Y, Otsuka R, Ando F, Shimokata H An evaluation of the relationship between daily steps and nocturia: Results of 4 year longitudinal study 29th Annual EAU Congress Stockholm 2014. 4. 13
- 25) Suzuki M Ultrasound-assisted prompted voiding care for institutionalized elderly with urinary incontinence. European Association of Urology Annual Meeting 2014 Stockholm
- 26) 鈴木基文：シンポジウム3 高齢者排泄ケアシステムの整備に向けて 本邦における高齢者尿失禁ケア支援拠点の現状 第27回 日本老年泌尿器科学会 2014. 5. 14
- 27) 鈴木基文：シンポジウム13「前立腺肥大症の治療戦略：ガイドライン解説」 第79回 日本泌尿器科学会東部総会 2014. 10. 14
- 28) 鈴木基文：特別講演「前立腺肥大症診療ガイドラインの解説」 杉並区泌尿器科医会学術講演会 2015. 1. 24
- 29) 鈴木基文：講演2「高齢者の排尿自立」 第19回 通信広域医療連携セミナー 2015. 1. 29
- 30) 鈴木基文：ランチョンセミナー5「高齢者排尿自立支援」 第32回 日本ストーマ・排泄リハビリテーション学会総会 2015. 2. 28
- 31) 鈴木基文：招請講演「高齢者の排尿疾患～尿失禁とどう向き合うか～」 ベネッセスタイルケア地域医療セミナー 2015. 3. 8
- 32) 松川宣久、後藤百万ら、尿流動態的側面からみた前立腺肥大症に対する α_1 遮断薬、5 α 還元酵素阻害薬併用療法での α_1 遮断薬中止の影響 第21回日本排尿機能学会、2014年9月19日、岡山
- 33) 松川宣久、後藤百万ら、 α_1 ブロッカーによる前立腺肥大症治療とテストステロンの関係 ～アンチエイジングに寄与するのか～ 第102回日本泌尿器科学会総会、2014年4月24日、神戸

H. 知的財産権の出願・登録状況

1. 特許取得

なし

2. 実用新案登録

なし

3. その他

なし